

ホスピタルクラウン

H o s p i t a l C l o w n

病院に笑いを届ける道化師



大 棟 耕 介

K o s u k e O m u n e



sanctuary books

ホスピタルクラウン

H o s p i t a l C l o w n

病院に笑いを届ける道化師

大 棟 耕 介

K o s u k e O m u n e





P R O L O G U E



いつ笑ってもいい。



どんな風に笑ってもいい。





Handwritten notes on a pink and blue background, partially obscured.

Handwritten notes on a white background with blue and red accents. The text is mostly illegible due to blurring.

Handwritten notes on a yellow background. The text is mostly illegible due to blurring.

Handwritten notes on a white background with blue borders, partially obscured.

Handwritten notes on a yellow background with red and black text. The text is mostly illegible due to blurring.

Handwritten notes on a white background with a grid or table structure. The text is mostly illegible due to blurring.

ベッドの上で、

女の子が不安そうに

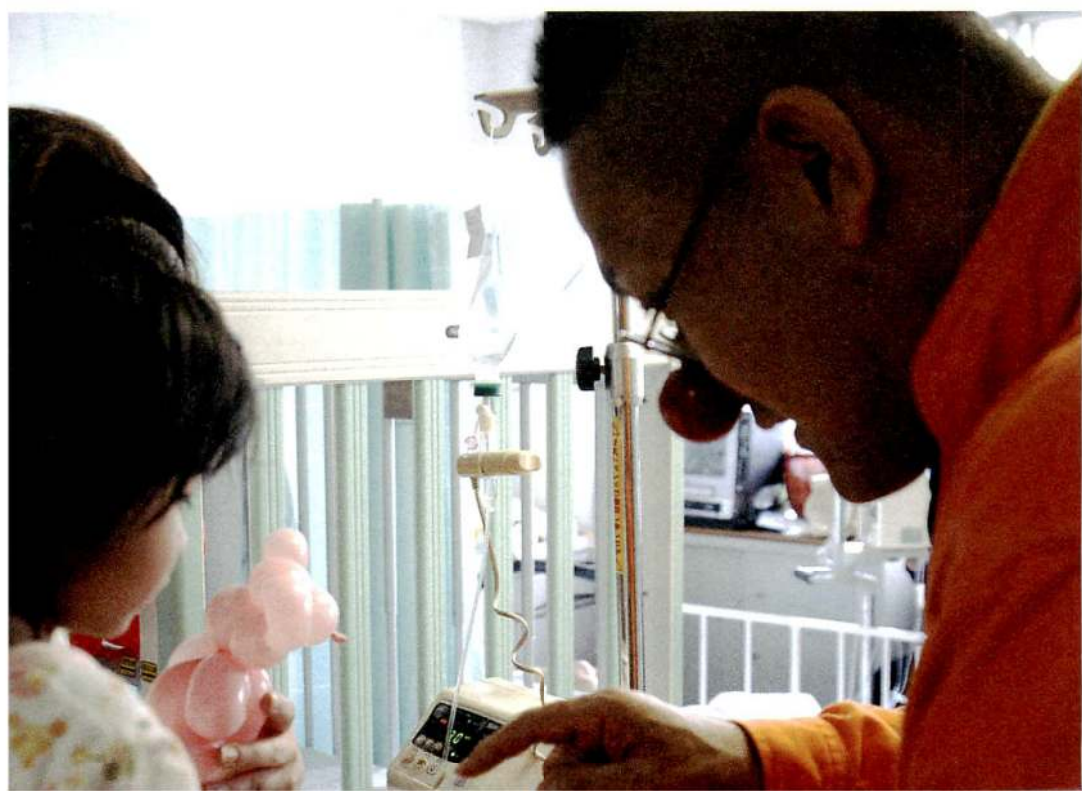
母親の腕にしがみついている。

「ピエロさんがきたよー」と

母親がやさしく話しかける。



ぼくはそっとベッドに近づき、
女の子の手を握る。
表情が少しだけやわらかくなった。



風船で手ぎわよく小犬を作り、
彼女の小さな手に持たせる。

彼女は恥ずかしそうに、
「ありがとう」といった。



「また遊ぼうね」と声をかけると、
「あくしゅ」といって
ぼくの手を握ってくれた。





ホ
ス
ピ
タ
ル
ク
ラ
ウ
ン

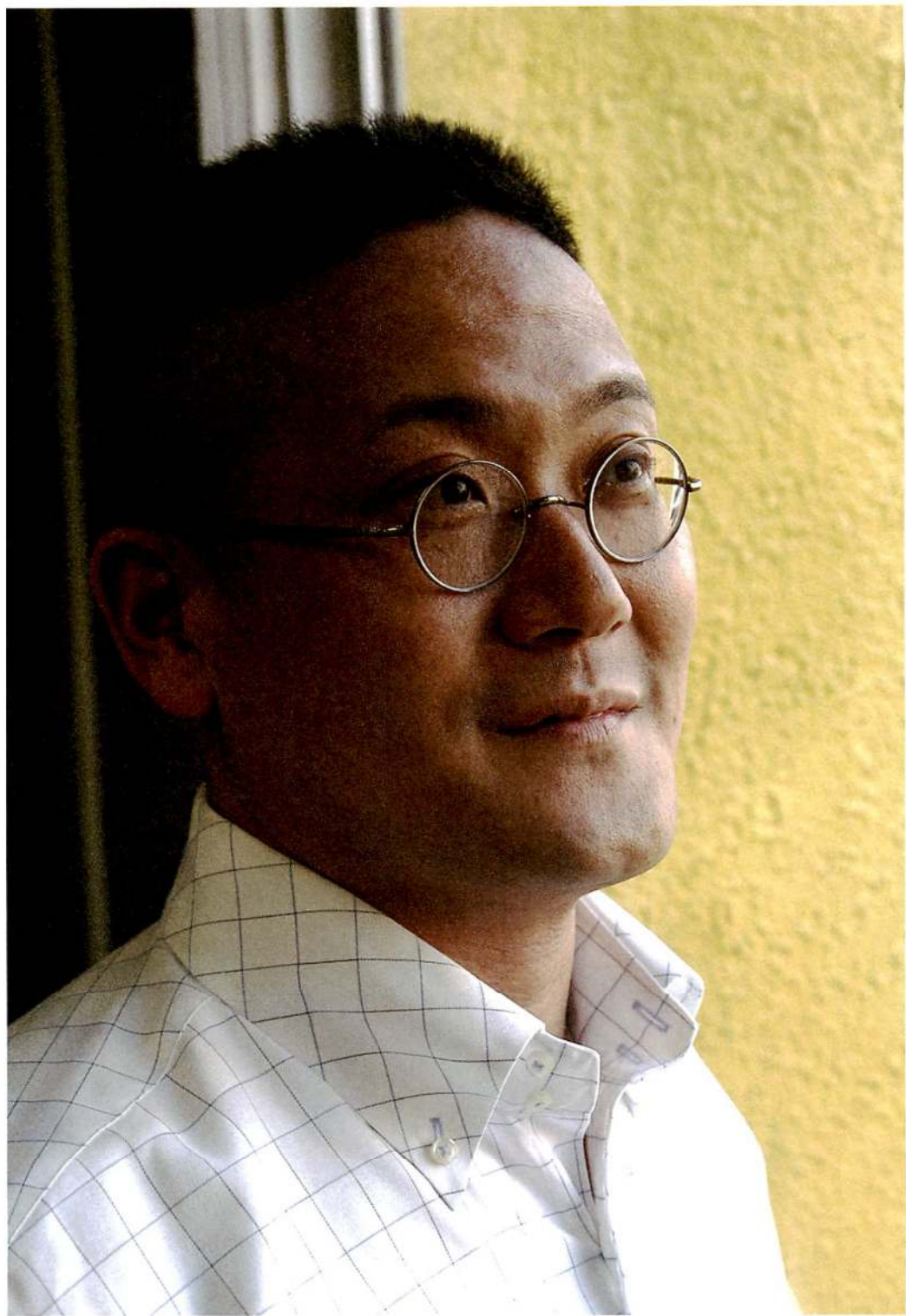
大
棟
耕
介



C o n t e n t s

病院のピエロさん	17
もっとマジメにやりなさい	23
子どもの死	27
バルーンはおいといて	30
病院のできごと	35
道化師の苦悩	43
派手なメイク	46
クラウンK	52
いい握手	60
拍手をさせない	64
ある姉妹のこと	67
笑顔の連鎖	73
手紙	78
ぼくの存在	82
いたずら	86
遊んであげているの？遊ばれているの？	94
大切な瞬間	99
カメラ	102
魔法のプロ	105
おばあちゃん道化師の教え	109
呼吸合わせ	116
ルール	119
パッチ・アダムスとの出会い	126
パッチと海外へ	132
ロシアの病院にて	138
正しいやり方	145
24時間道化師	148
パッチが教えてくれたこと	152
道化師（クラウン）社長	157
ホスピタル・クラウン	168
笑いの力	176
小さな誕生会	179
クラウン	184
大棟耕介	188
ぼくの夢	195





CHAPTER

01



病院のピエロさん

ぼくは道化師だ。

赤い鼻とコミカルな衣装を身につけ、手品やアクロバット、パントマイムなどいろんな芸を繰り出してお客さんを楽ませる。といっても大道芸人やマジシャンのように、お客さんたちが手に汗にぎるような、スリル満点のショーを演じるわけじゃない。たまたまその場にいた人たちをなごませ、笑わせ、たとえ一瞬でもいいからみんなに日常のことを忘れてもらうのが仕事だ。

場所は選ばない。サーカスや遊園地はもちろん学校や結婚式、クリスマスや誕生会、戦地や被災地など、依頼があればどこでもパフォーマンスをする。

だから病院から依頼があつたときも、とくに断る理由はなかった。「闘病中の子どもたちを元気づけてほしい」それは子どもを

喜ばせることを得意とするぼくたち道化師にとって、まさにふさわしい仕事のように思えた。

ホスピタル・クラウン。

病院をたずねて、闘病中の子どもたちを元気づける道化師のことをそう呼ぶ。欧米では80年代にはじまり、今は治療法のひとつとして認識されている。日本でなじみ深いのはアメリカ人の医師、パッチ・アダムスだろう。彼は映画のモデルにもなり、ホスピタル・クラウンの第一人者として世界中に知られている。

アメリカで道化師の勉強をしているときに、ぼくはホスピタル・クラウンの存在をはじめて知った。道化師はただサーカスや遊園地でショーをするだけでなく、心のケアを必要とする人たちの前にも現れてパフォーマンスをする。施設や病院のスタッフ

も、道化師たちの訪問をこころよく受け入れ、いつしよに楽しい時間を過ごす。欧米にはそういう文化がある。

でも日本ではまだまだなじみの薄い活動だ。

なにしろ病気の子どもが相手だし、子どももの期待を裏切ることできない。責任も重い。病院でなにが起きるかわからないし、なにか起きたときにはすでに手遅れかもしれない。

正直いつてはじめは「やりたい」とは思わなかった。でも同時に「やらなきゃいけない」とも思った。

痛い注射に苦い薬、退屈な検査にこわい手術。家族とも離ればなれ。病気の治療をつづける一方、入院はいやなことばかりで、子どもたちの心には目に見えないストレスがたまっている。

病院の先生は「笑顔はどんなクスリにも勝る」といった。

ぼくには病気は治せない。でもカラフルな衣装とおどけた芸で、味気ない病室の空気を、ガラッと変えられたら面白いかもしれない。

各地でショーをするという日常的な仕事があっても、病床の子どもたちと一緒に遊ぶ時間を持たないはずがない。もちろん無償だ。

活動をはじめて3年。病院に行く前、じつは「子どもが待つている」という使命感よりも、「ああ、今日は体がダルいけど友だちが待っているから、行くか」という軽い気持ちで行くことが多くなった。

でも、子どもに会うとやっぱり楽しい。ぼくは大人だけど、彼らはぼくのことを対等に見てくれる。人というよりも、たぶん奇

妙な動物かなんかに見えているんだろう。

それから、半年以上ひと言も話さなかった子どもが「ありがとう」といつてくれたり、つらい治療によつて表情をなくしていた子どもが笑つてくれたこともある。

そんなとき、本当にやつててよかつたなと思う。